陸水研究（Limnological Study）7：1-2 (2020)

巻頭言

先輩たちの言葉

古武家善成

近畿支部会誌「陸水研究」は 2020 年発行の本巻で第 7 巻を迎える．筆者は 2014 年に支部会長をしていた縁で三田村緒佐武元支部会長の意志を引き継いで，本誌の誕生にかかわることになった．その経緯については第 1 巻（2014）の「発刊の挨拶」に記しておいたが，発刊の原動力として，阪神・淡路大震災（1995 年）や東日本大震災（2011 年）を体験し，巨大都市の脆弱さや日本の環境・エネルギー戦略の危うさを目の当たりにした私たちが考えるべきことは，学問的到達点を前進させる義務だけでなく，学問的成果をいかに社会へ還元していくかを考えることであり，そのプラットフォームとして本誌を考えたのである．「この会誌を専門家と市民の情報交流を通した社会への情報発信の場にしていきたい」と記したが，そのような特徴が出でているか，ここらで検討する必要があるだろう．

このような視点で既刊 6 冊のコンテンツを見直してみると，「澤井健二 (2015)：寝屋川流域における水辺環境と市民活動，陸水研究，**2**，85-90.」と「相馬理央・片野　泉 (2017)：姫路市近郊のため池 38 面の基礎的な水質，陸水研究，4，27-33.」が目に留まった．1 編目は「雑報」であるが，まさに寝屋川流域における市民活動を扱っており，「専門家と市民の情報交流」を記述している．2 編目は「調査・報告」であり，姫路市近郊のため池の水質の特徴の要因を解析したもので陸水学の範疇に入る基礎的な報告であるが，私たち市民の生活空間に近い身近な水辺空間を対象としており，コンクリート護岸率と水質の関係を考察するなど，住宅地のため池に特有の特徴を見出そうとしている．

もちろん，本誌には研究発表会の講演要旨が再掲されている．発表会では「専門家と市民の情報交流」を扱ったものも少なくないのであるが，本誌の主要コンテンツと考えられる原著論文，総説，短報，調査・報告，雑報等の中での割合を考えると，その掲載編数は多くない．しかし，本誌の最初に掲載される「巻頭言」には，筆者の研究・活動の歴史，思想，考え方等がかなり明確に書かれており，専門家が学問的成果をどのように社会へ還元すべきかを垣間見ることができる．そこで，ここでは，これまでの「巻頭言」に焦点を当てて，この問題を考えてみたい．

第 2 巻（2015）は拙文の「“Mega Disaster”と陸水環境」である．阪神・淡路大震災 20 年目の 2015 年に発刊されたことをとらえて，震災による陸水環境への影響調査結果を振り返った．そして，2011 年の東日本大震災時には多くの陸水研究者がその影響解明に関わっていることを踏まえ，支部会レベルでも Disaster による環境影響を解明する組織的取り組みができるプラットフォームづくりが必要ではないかと記した．

第 3 巻（2016）は大阪市立自然史博物館顧問の谷田一三氏の「大きな国際学会と小さな国際学会：私の視座と運営方法の紹介」である．前半は院生時代から若手研究者の頃の思い出である．生態学会，陸水学会，SIL（国際理論応用陸水学会），水生昆虫の国際学会と，段々と活動の場を広げていく筆者の青春物語が活写されている．私も学会活動の始まりは陸水学会であり，その頃石川県白山自然保護センターに勤務していた谷田氏とは，同じ自治体研究者という立場からか，自治体研究所での研究環境の問題点を語り合った．私は，現在は研究活動の軸足を日本水環境学会に置いているが，当時は，水環境学会では水処理分野の研究が特に活発だったので，物理，化学，生物の 3 分野の研究者がバランスよく発表している陸水学会の方が，水環境学会よりも視野を広げられると思っていた．ある時期に自治体の環境分野の研究者が水環境学会に移動して，今日では水環境学会でもフィールドをベースとした環境研究の発表が隆盛しているが，当時は私を含め多くの自治体の環境研究者が陸水学会で活動していた．

後半では，小さな規模の学会や研究会の楽しさ，面白さ

元神戸学院大学（元支部会長）　〒神戸市灘区土山町 7-32-401　dfmfn512@kcc.zaq.ne.jp

が書かれている．小さな学会における研究者間の濃密な関係性から，得るものは多いということであろう．この支部会についても「コンパクトさを大事にしてほしい」と述べられている．

第 4 巻（2017）は元滋賀県立大学の三田村緒佐武氏の「陸水研究の巻終言にしないために」である．高尚な主張がなされており，主張の理解に多少困難なところもあるが，理解が進むと胸に響く．論の基調は自己の研究者人生への反省であるが，それを述べること自体我々への問いかけである．筆者はこの論を「近畿支部会組織および支部会会員への批判的総括文であるが，非難文ではない」と述べている．

筆者の考えを理解するためのいくつかのキーセンテンスが記されている．それは，「『陸水研究者』から『陸水学者』へ，そして『陸水心学者』へと進化すべき」であり，「『なぜ陸水研究を行うのか』,『誰のために陸水研究を行うのか』を参加住民とともに考え，参加者自らが陸水学の有識賢者になり，陸水『学』，そして陸水『心』学を志す学徒の基点に戻る」必要がある，ということだろう．また，「時間軸が直線的な『開発』思考を，時間軸が輪廻的な『循環』思考へ正常化させる」ことや，「『科学は冷たくて暗い』を『科学は温かく明るい』にする必要がある」などが記されている．ここで出てくる「心学」とは，辞書には「心を修練し，その能力と主体性を重視する学問」とあるが，筆者は「『心学者』とは，心の修練を行い利他精神で人と草木に対して憐れみを抱く者」と述べている．

筆者の主張を私なりに理解すれば，陸水研究を地域住民とともに発展させ，学会活動を住民に開かれたものにするということだと思う．筆者も近畿支部会への提言として，「陸水学習住民活動部」の設立，住民参加型の発表会への改組，査読を経ない校閲のみの会誌編集，「陸水巡検」と「陸水懇話会」の開催などを挙げている．

第 5 巻（2018）は奈良学園大学の磯部ゆう氏の「川で思うこと」である．水生昆虫から始まる長い研究生活を振り返った文章であるが，研究フィールドである春の河原での水生昆虫と藻類の関わりを書いたところなどを読むと，こちらも温かい楽しい気分になってくる．筆者の研究は，分散し集合し成長し子孫を作るという動きを示す水生昆虫により全体と一部を感じ取る目と心を磨かれ，その後，もっと面白い昆虫の行動を求めて成虫の繁殖に関わるドラミングの研究へと進む．そして，最後に水生昆虫と藻類の相互作用に行きつく．このような研究の流れの節目には，そちらの方へ結果的に筆者を導いた学生との関わりがあった．筆者はある種の偶然と必然により良い研究フィールドと面白い研究対象に出会ってきたが，学生との出会いは，それこそ“一期一会”の貴重なものだったのだろう．筆者はそのような研究生活の変遷を「時間と空間と形の世界が広がった」,「良いフィールドと人が出会った時, 心躍る研究が生まれる」と表現している．

第 6 巻（2019）は京都大学の杉山雅人氏の「水を想う」である．タイトルからわかるようにこの巻頭言は水にまつわる 5 つの主張（想い）で構成されている．1 つ目は，「生命は海から生まれた」と言われるが，本当に必要とされるのは淡水であるということ，2 つ目は，「日本は水の豊かな国」と言われるが，人が使用でき産業に使用できるという点からみると日本の降水量は多くないこと, 3 つ目は，水は人が集まればたやすく汚れるので，水質汚濁は古代から記録されていること, 4 つ目は, 水質汚濁を防ぐためには，法律による規制と環境教育の推進が必要であるということ，

5 つ目は, 重要な点は, 規制を行う者は問題を見通す冷徹な眼と環境・市民に対する慈愛の眼を持つ必要があるということ，環境教育については市民ボランティアの活躍など成果が表れてきているということが述べられている.「支部会研究発表会から育った若い人たちが，水への想い, 環境への想いを育て, 次代の人たちに伝えるなら，水の世紀である 21 世紀も少しは楽に越えられるのかもしれない.」と結んでいる．

このような先輩の言葉を読者の皆さんはどのように受け止めるだろうか．自分が行っている研究スタイルを見直すきっかけにする人もいるだろうし，研究目的に社会との関係性を意識しようと考える人も出てくるかもしれない. そのようなリアクションが出れば「巻頭言」を掲載する意味もある．

2015 年に国連で採択された SDGs（持続可能な開発目標）は 17 のゴール，169 のターゲットから構成されている．この考え方の優れているところは，環境問題の解決のためには，貧困，飢餓，健康，教育，ジェンダー問題など関連する社会問題を同時に解決しないといけないことを宣言しており，「地球上の誰一人も取り残さない」と誓っていることである．環境問題と社会問題が不可分であることをよく示している．もちろん，陸水学は環境学ではないので，陸水学を研究・発展させるのに社会的視点が必ず必要と言っている訳ではないが，現在の世界人口が 72 億で，2100 年には 112 億と推定されている人類の生存圧が生態系に及ぼす影響を考えれば，座視することはできない．自分の研究内容と社会との関わりをいま一度考える必要がありそうである